

## 岩国市芦山家に伝わる婦人臓図について

片岡 勝子

広島大学

岩国市の芦山家は江戸時代より続く医家で、婦人臓図が伝えられている（以下岩国図と略称）。題箋には記載がない。この婦人臓図は、明和8（1771）年12月に行われた観臓を山脇東門（玄陶、東洋の次男）が菅原誠意に描かせた『玉碎臓図』（東京大学所蔵、東大図）と基本的には同じもので、順序は違うものの、全ての図が両者で一致している。同様の『婦人臓図』は千葉大学にも所蔵（千葉大図）されているので、少なくとも3部が現存していることになる。

岩国図の順序は不自然で、軸装時の誤りであると考えられるが、現在の軸装は近年なされたもので、順序の間違いがいつ起きたのかは分からない。東大図と岩国図について、主な相違点を以下に述べる。

東大図の巻末には東門による跋文と落款（署名は橋陶）がある。その日付は安永3（1774）年12月で、観臓から約3年を経過している。跋文の字は極細筆による丹念な楷書で、陶の字は右横に張り出して書かれている。岩国図の巻末には東大図の跋文が写されているが、陶の字は横に張り出すことがなく、文中の「は」に置換されており、橋陶の名の下に押印はない。さらに岩国図の末尾には「寛政四年壬子四月応坂本生需 法眼橋之豹書」として押印がある。之豹は東門の長男で、寛政3（1791）年に法眼に叙せられている。

肺は左右各2葉のように描かれており、両図でもっとも目立つ違いは肺の表面の描写である。東大図では表面は概ね黒紫色に塗られ、葉の端が白くぼかされている、そして全体に細線に点描を加えた渦巻き状の模様がある。岩国図では塵埃の沈着によって黒くなっている様子を表現しようと苦心した様子がうかがえる。葉の辺縁部には、部分的には東大図のような線と点による描写もある。

頭蓋を開き硬膜を上から見た「両脳未去膜」図をみると、東大図には正中線は描かれておらず、岩国図には薄い正中線がある。硬膜の血管は東大図では白い硬膜の上に赤い描線で描かれている。岩国図では血管は薄墨と赤の線で描かれ、両者は微妙にずれており、薄墨の線、白い絵の具（硬膜）、赤い線の順に描いたことが分かる。また、「肝胃相連」図の胃の血管をみると、東大図では太い血管は赤い二重線で、それから分枝した細い血管は一本線で描かれている。岩国図では、硬膜の場合と同様に、血管は薄墨の線と微妙にずれた赤い線で描かれている。

骨は「自肋至腰骨前面」、「同側面」として、胸骨、肋骨、脊柱、寛骨が描かれている。両図ともに肋骨は10対で、浮遊肋はない。胸椎は数えられないが、腰椎は11ある。寛骨、特に恥骨の形は奇妙である。腰椎の一部と仙骨は別に拡大図があるが、岩国図の方が遙かにリアルに骨の質感が表現されている。

各図の題字は、東大図も岩国図も同じ筆者による可能性がある。岩国図では筆から滴った絵の具を含む水でできたと思われる汚れが随所にみられるが、東大図ではこのような汚れはない。また、岩国図には保管中にできた絵の具の剥落もかなりあるが、東大図の保存状態は極めてよい。

東門は東大図を正本、千葉大図を副本と考えていた。岩国図には観臓をした者でなければ分からないリアリティがあり、それらの原図である可能性が強い。之豹はそれに東門による跋文を写して、坂本氏（5代喜庵）に渡したと考えられる。

坂本家の代々は御番医を務め、侍医になった者もいる。4代玄隆、5代喜庵、6代竜伯はともに京都に遊学して山脇氏の門に学んでいる。芦山家の代々は浪人格として吉川藩内の高森や河内で医業に従事している。坂本家と芦山家は数度に亘って養子縁組をしており、また6代竜伯は後に儒業を命じられて医業を廃したことから、臓図が芦山家に渡ったことは了解できる。